



木造雷神像

熊本市上高橋町 聖徳寺安置  
像高（現状）六七・八 鎌倉時代後期

一軀

# 市史編さんだより

## 中世文化財調査から

中世専門部会 大倉 隆一

「肥後國誌」は聖徳寺について、寺内に雷神堂があつて雷よけの札を出していたことを記しているので、本像は元々この堂にまつられていたと思われる。また、境内の古井戸には雷の子が落ちたという伝説も伝えられている。普通雷神は風神とセットで造られるが、風神は青身で背に風袋を抱ぎ白雲に乗る鬼形、雷神は赤又は白身で小鼓を連ねた輪を負い、手に撥を持って黒雲に乗る鬼形に造られる。本像は持物が失われていていずれか判然としないが、後世の補彩とはいえ肉身部を赤く塗つてあることや「肥後國誌」の記載などからみて、おそらく雷神像であったと見てよいであろう。

広く風神・雷神像の作例を見ると、彫刻では京都・三十三間堂のものが最も有名で、絵では同じく建仁寺藏の俵屋宗達筆のそれが最も有名であろう。また、雷神像のみを描いたものには京都北野天満宮藏の「北野天神縁起絵巻」などがある。しかし、彫刻の作例は意外に少なく、国指定の例では三十三間堂の二十八部衆中八部衆とセットの風神・雷神像や滋賀・常楽寺の二十八部衆中の一つくらいである。県下の風神・雷神像としては、本像がい

編集・発行  
熊本市新熊本市史編纂委員会  
熊本市手取本町1の1  
市史編纂事務局  
☎328-2033・2038

目次

- ▽木造雷神像
- ▽特集「くまもと百年」
- 座談会
- 大熊本市の成立
- 占領行政と熊本
- 自然・民俗・文化財専門部会の設置
- 日誌抄
- 神園山瓦窯址
- 細川藩御召船の文書
- 史料調査にご協力いただいた方々
- △編集後記
- ▽本造雷神像
- ▽自然・民俗・文化財専門部会の設置
- ▽日誌抄
- ▽神園山瓦窯址
- ▽細川藩御召船の文書
- ▽史料調査にご協力いただいた方々
- ▽編集後記
- ▽本造雷神像
- ▽特集「くまもと百年」
- 座談会
- 大熊本市の成立
- 占領行政と熊本
- 自然・民俗・文化財専門部会の設置
- 日誌抄
- 神園山瓦窯址
- 細川藩御召船の文書
- 史料調査にご協力いただいた方々
- △編集後記

まのところ唯一の例と目される大変珍しいものである。彫刻的に見ると、傷みや後世の彩色に覆われてそれほど明確ではないが、奇怪な顔貌や筋肉の盛り上がりなどに鎌倉彫刻通有の写実的表現がみられる。ただ、妙法院像や常楽寺像と違って腰布を着けない裸一つの表現は、見方によつては古様を伝えているともいえるし、奇怪な顔貌表現には見るべきところもあるが、筋肉表現などにも近畿地方の作にみられる洗練度は認められない。鎌倉時代後期のこの地方の作と見ておきたい。

右のように、本像は鎌倉時代にまでさかのぼる雷神像として大変貴重であるが、さらに、これが二十八部衆中の風神・雷神像のセットとして造られたことが想定されることから、鎌倉時代にこの高橋の地には千手觀音を本尊とし、不動明王・毘沙門天を脇侍とする三尊及び二十八部衆が安置された一大伽藍があつたことが想像される。それは付近に散在する鎌倉時代の五輪塔残欠などからも想像されるが、これらの存在は中世の高橋地区の繁栄を具体的に物語るものであり、さらに中世に外護者として聖徳寺を支えた勢力の問題など、解明すべき新たな問題を提起するものもある。



## 特集『くまもと百年』

## 【座談会】

## 将来の都市像を探る

出席者

長野敏一（市史編纂委員）

花立三郎（市史編纂委員・近代部会長）

平野敏也（市史編纂委員・現代部会長）

安永路子（市史編纂委員）

井上智重（熊本日日新聞社編集委員）

井上　熊本の近代について語るというのがテーマなんですが、ちょうど熊本市は市制百周年。熊本とはいつたいろいろの都市なのか、将来、求められる都市像とはー。その辺りも話していただけたら、と思います。長野先生は遅れられるところで、ぼつぼつ話を進めていきましょうか。幾つかのキーワードを用意してきました。一つのキーワードは種田山頭火です。今年は没後五十年ということでブームもありますが、山頭火は山口県の人間で、家業の造り酒屋が倒産し、何のゆかりもない熊本に大正五年、妻を伴ってやってくる。山頭火を熊本市に引きつけたものは何だったのか。安永先生は山頭火にもお会いになつておられますか。

安永　本屋をやつていた私の家に父（安永信一郎・歌人）とがります。「妻子なんか捨てて、行脚に出よう」などを父を誘う。父は一生懸命で、奥さんたちを働かせねばなんとか食べていいけるかを断つていたのを覚えていました。山頭火は最初から働きたくなくて…。

井上　しかし、働きたくないけど熊本に来たら食べられる。そういう雰囲気があつたわけでしょうか。

安永　奥さんたちを働かせねばなんとか食べていいけるという、そういう計算が山頭火にはあつたような気がします。奥さんは無口でいらしてひとりで仕事をしてらしです。もんね。たまたまふらっと山頭火が帰ってくるとやつぱり大変でしよう。私の父がいつも山頭火の家であるお店にかけつけたりしていました。

井上　山頭火の面倒を見ていたのが、五高生とか、通信局に勤めていた文学青年なんですね。学生の町であり、お役人の町であった。五高の存在は大きかったと思います。漱石、小泉八雲。いずれも五高的教官。それに鎮台、六師団の存在。漱石の句友、渋川玄耳は六師団の法官部に務めていた。画家の藤田嗣治も父親が六師団の衛戍病院長だったことで五歳から十二歳まで熊本で送っている。

第二のキーワードが六師団で、安永先生がよくご存じの斎藤史さん（歌人・長野市在住）のお父さんは有名な歌人将軍といわれた斎藤瀬ですね。六師団の第十一旅団長として熊本に赴任し、安永信一郎、黒木伝松らと熊本歌話の会を作っている。

安永　それまであちこちにあつた歌の結社が斎藤瀬さんが来て、ワーッと一つにまとまるんですね。熊本の文化人たちを巻き込んでしまうわけ。一つはやっぱり軍隊が強かつたからかしら。軍が良いとか悪いとかではなく、力を持つていましたね。今考えれば、不思議な現象。そして斎藤瀬さんが熊本を離れてからまた熊本の歌人たちもばらばらになつてしまふ。やっぱし歌の場合も旅団長として統率した感じがします。

井上　軍人は一種の赴任族ですが、熊本は赴任族の文化とよく言いますね。よそからやつて来た人たちの影響で、熊本の基礎みたいなものを作り上げた。すっかり熊本そのもので、加藤・細川によつて形づくられたものが現在も続いている気がしますね。近代になり、風が確かに人つてきたが、そのよそのがもたらした文化が土台

許さないところもありますね。

花立　県外資本やなんかそうでしょう。入ろうと思つてもなかなか入れないでしよう。

平野　百年という物差しでなくて、もっと長い物差しで考えると、土着というのは菊池だけです。後は支配者として加藤、細川が来る。そして、近代が来る。近代のあけぼのには横井小楠がいるんですが、熊本では排斥されれる。明治になり、ジエンーズが熊本洋学校の教師として迎えられるが、あまり排斥されていない。神風連とか一部の国粹主義者は別ですが。そして熊本にもすぐれた人材が育つていくわけです。熊本に限らずどこにも風の人と土の人とがあるわけですが、風の人がやってきて、そこで刺激を与え、そして段々それが定着してということではないでしょうか。球磨の文化がそのままですか、熊本も一つの盆地的な文化の面があつて、よそからは入りにくいか、入ればそこからちゃんと落ち着いていく。そういう一面があるのかな、と思います。

井上　風と土の風景ですね。

平野　宮本武蔵もそうだし、漱石、八雲…。六師団の軍人たちもやはりそういうことでしょう。

安永　何か偉そうなやつが好きなんですね。

平野　土着の者は土着の偉そうな人は嫌いなんですね。いまもそうですよ。



井上　熊本の近代について語るというのがテーマなんですが、ちょうど熊本市は市制百周年。熊本とはいつたいろいろの都市なのか、将来、求められる都市像とはー。その辺りも話していただけたら、と思います。長野先生は遅れられるところで、ぼつぼつ話を進めていきましょうか。幾つかのキーワードを用意してきました。一つのキーワードは種田山頭火です。今年は没後五十年といふことでブームもありますが、山頭火は山口県の人間で、家業の造り酒屋が倒産し、何のゆかりもない熊本に大正五年、妻を伴ってやってくる。山頭火を熊本市に引きつけたものは何だったのか。安永先生は山頭火にもお会いになつておられますか。

安永　本屋をやつていた私の家に父（安永信一郎・歌人）とがります。「妻子なんか捨てて、行脚に出よう」などを父を誘う。父は一生懸命で、奥さんたちを働かせねばなんとか食べていいけるかを断つていたのを覚えていました。山頭火は最初から働きたくなくて…。



花立　加藤も細川もよそも

川はもうよそものではないと思うんですよ。二百年もおれば。それから加藤も熊本城を築き、治水や土木工事をなし

て、熊本の基礎みたいなものを作り上げた。すっかり熊本そのもので、加藤・細川によつて形づくられたものが現在も続いている気がしますね。近代になり、風が確かに人つてきたが、そのよそのがもたらした文化が土台



の文化をどこまで変えたかですね。僕はあんまり変わつてない気がする。

**平野** 確かにそうですね。

**花立** 熊本に細川が築いたところの文化はずつと続いていますよ。西南の役で城下が焼け、町としての古さが失われたのは少し残念なんですが、むしろ形が無くなつたことで細川が培った精神は残っているのではないか。では、細川の精神文化とは何か。熊本は保守的といながら、小楠のような異質的なものを育てる、あるいは生み出す、弾力性を持つていますね。それから外から物を受け入れる開明性を持つている。

**井上** もう一つ、キーワードとして高橋長秋のことを考えてましてね。高橋は細川家の財政顧問みたいなこともやつた人ですが、中央にあって、近代都市熊本の生み親でもあった。大正十年の周辺町村の大合併や市電の敷設などこの人の考えに負うところが大きかったといいますね。高橋守雄を市長に据え、彼をしてあれだけの仕事を残させたのも、長秋のバックがあり、知恵があり、実力があつたからといわれる。中央と熊本とのかかわりみたいなものを持っていただけたら。

**花立**

一つは済々賀が出来たのと紫渕会ですね。紫渕会が出来る時に中央と熊本が結びつく。明治十四年ですが、中央の方では井上毅とか安場保和、元田永孚もタッチしたと思いますけれども、それとこちらは佐々友房がいて…。

**平野** その後、佐々が東京

に出でいくと、こちらには山

田珠一がいるとか。うまく連

動が出来ているんですね。そ

ういうつながりで非常に中央

の情報に敏であつた。情報に

敏感ということはその前からで、維新のバスに乗り遅れたのもあまりに情報に关心があり過ぎたためだともいわ

れますね。

**花立** 中央とのつながり。これは九州の中核管理都市として中央の出先がたくさんあり、そうした役所を通じてなされた面も大きかつたと思いますよ。

**安永** その下地として実は封建都市としての機能があつたのではないかしら。藩政というのは江戸と国元との

“二都”制度でしよう。細川藩政の下でそうした機能があつたのではないかしら。藩政というのは江戸と国元との

完璧に出来上がつていたのではないですか、熊本の場合。

**平野** 確かに経済的、生活的に安定したものがあつた。

それは戦国時代でもそ�で、菊池を頼つてたくさんの学者たちがやって来て、菊池の教学というものが出来上がり。一般的に豊かであつたことは事実でしょうね。熊本は貧しいと言う人もいますがね。何となく落ち着けそんな、そんなところがあるでしょう。

**花立** 戦時中、熊本は食糧が多いみたいに見られていますね。高橋守雄を市長に据え、彼をしてあれだけの仕事

事を残させたのも、長秋のバックがあり、知恵があり、実力があつたからといわれる。中央と熊本とのかかわり

みたいなものを持っていただけたら。

**花立**

ましだけど、昔からそうだったのでしょうかね。

**井上** 兵隊で熊本に来て、そのまま戦後、市民として居着いたという人は多いですね。

**平野** 明治になつて筑後からずいぶん熊本にやつてきて住み着いたという話は聞きますね。

**花立** 案外、そうした分野は研究されていませんね。

肥後六花なんかも専門文化ですかね。調べれば、あると思いますが、これから研究されねばならない分野でありますね。

**平野** 工芸なんかもハトロンは武士ですね。

**花立** 明治に入り、軍隊が商人を育てたのは確かです

ね。味噌、醤油、酒、これなんか軍隊があつたから発展

していくわけですね。御用達というか。その前に五十万石

の城下町があつて、街を中心とした消費都市が形成され

いろんな人々が集まつてきて、都市を形づくつていった。

ある意味で近代的な都市を。軍人は必ずしも軍服のにおいだけではなく、さつきの齊藤瀬ではないですが、一種の文化みたいな、モダンな文化みたいなものを置いていったような気がするんですけどね。

**花立** 二十三連隊が移つたから出来た。ちょうどあれが熊本の町を一分しているようになつてましたからね。

軍隊が移つたのは、やはり太正デモクラシーの時期だということを感じさせますね。それだけ民衆の力が強まり、

軍隊が熊本の町の中央にどつからと座つていることが許されなくなつたというか。二十三連隊が移り、電車を引き

水上道を通してことが出来、熊本の三大事業が完成し、一挙に熊本市が大きく発展していったということでしょうね。

**長野** どうも遅くなりました。

**井上** 熊本市は「軍都」「官房の町」「文教都市」、「九州における管理都市」とか、様々な形容がなされてきたわけですが、いつたい、どういう都市構造なのか。先生は長く熊本の経済をご研究なさっているわけですが、

長野 熊本には最初、全国

四つのうちの一つの鎮台がで

き、のち師団への編成替えて

六師団が出来た。師団は総合的な軍事単位で、歩兵だけではなく、騎兵も工兵も砲兵もい

る。これらをつなぐための交通とか通信とか補給とか全部総合しなければならない。そのため農業、通信、大蔵といった関係の官庁が出てくるわけなんです。

**井上** 熊本の近代百年を考える場合、車を抜きには語れないわけですね。

**長野** 九州では幕末は貿易の関係で長崎が中心だった。

明治に入り、富国強兵が国の政策の中心になる。官庁な

んかも九州の中心部の熊本に中核を置くわけですね。そして戦後は経済が中心だから中枢は福岡に行くのですね。

**花立** 明治三十年、八幡製鉄が出来て、福岡ですね。

長野 経済の力としてはまだ後だと思いますよ。人口も国勢調査で確か一度だけ大正末期に熊本市が福岡市を越すことがあります。戦後、鉄と石炭に対する傾斜生産で大量の国家助成が入り、栄えていく。それで自然に九州の中心が福岡へ移っていったんだと考えるわけです。

**井上** 軍、あるいは官庁は熊本市にとどますそ野の広い「産業」だったというわけで…。

**長野** 現在もさうですが、熊本は農業とか工業で稼ぎ出すカネの量よりも国庫から入ってくるカネの方が多いんです。それは九州全体や南九州を所管するような官庁があるからなんです。ほかにも自衛隊関係、労働、厚生、文部省関係のカネが大量に入ってくる。それで熊本市が膨張していくんですね。そして周辺部が潤う。すなわち周辺部は熊本市に従属する形で発展するわけです。昭和三十六年に「熊本県の實際収支の研究」を出しましたが、熊本県に入ってくるカネのうち、当時で五五%が国庫から入ってくるカネですよ。そして四五%が熊本の生産等で稼ぐカネ。その上當時日本経済が一〇%発展する財政規模が一六%位膨らむんです。だから、東海道等よその県で日本経済を発展させてくれるとそれが自然に熊本に入ってくる形になる。また日本経済全体が悪くなつても財政は公債でこれを補うので、景気が良くても悪くとも一年半後には熊本は潤うのです。

今から五年ほど前、簡単な方法で数字を出してみまし  
たら、三十五年に比べ農業生産額が七、八倍、工業生産額が十六倍、ところが国庫金が二十一倍になつていて、結局、熊本市の場合、第三次産業が地元の経済を引き上げている。第三次産業の中で一番大きいのは学校関係とか医療機関。これらはほとんどみな国のカネ。学校関係なんかもそうでしょう。私学も含め。

**花立** 熊本市も工業立市を目指して工場誘致に努力した時期がありますね。

**長野** 今日、工場誘致といいましてもね。物理的な生産の場所はあるわけですが、儲けは本社がもつていきましたので、熊本では労賃と現地で支払う諸経費だから、雇用効果はあります。

**井上** 長野先生から実に明快に分析していただいたわけですが、たゞ、よそで稼がれた国の金で潤っているという寂しい感じがいたしますね。

**井上** ただでは、市民としては少し寂しい感じがいたしますね。

**井上** だけでは、市民としては少し寂しい感じがいたしますね。

**井上** ただし、長野先生が指摘なさったように学校が熊本市に多いということ、それも個性的な。近代百年の熊本市の顔には確かに「軍」とか「官」とかの顔がありますが、もう一つ「学」としての顔。これがあると思いませんね。それは伝統的なものと思う。

**安永** 熊本から出ていった人は皆、教育に熱心で人材育成を言いますね。それに学問的なレベルが高く、買われている。先ほど話に出ました井上毅。古いところでは小楠や元田永孚。清浦奎吾なんか伊藤博文や山県有朋に引き上げられている。徳というか、それだけ学問があつたんでしょうね。

**平野** 時習館の中から生まれてきたんでしょうかね。

**安永** 鈴木健二さんがいらしたりするのだから。

**平野** 都市としてのアイデンティティーというのはあると思いますよ。それが最近、少し希薄になつてきている。しつかりしないと普通の地方都市になつてしまつ。

**安永** 一つ都市としてのバックボーンを持たないといけないと思いますね。

**井上** どうもまずい司会でしたが、長時間ありがとうございました。

**安永** 熊本は最後の砦といった感じがしますね。強制的な学問に対する関心というか、態度といいますか。それが一つの熊本の特徴だと思いますね。

**井上** 現在の熊本学園（熊本商大・短大）、前身は東洋語学専門学校ですね。これなんかも佐々友房、津田静一を中心とした流れをくんでいます。

**平野** その通りですね。東洋語学の母体となつたのは熊本海外協会で、その前身は東亞同志会です。熊目の前身の九州日日、済々堂と同じ幹から生まれている。東亞同文書院の創立に尽力した宗方小太郎や上海日報を經營した井手三郎、それに安達謙蔵、平山岩彦、小早川秀雄、阿部野利恭ら、熊本人は海外、特に大陸に早くから目を向けていますね。

**長野** 語專の設立のことだつたら、松村武雄さんが詳しい。

**井上** 歴代理事長に石坂繁とか高橋守雄が名を連ねていますね。いずれも名市長といわれた人物。高橋守雄は初代学長でもある。石坂さんが市長を辞めて、教壇にも立ち、中国哲学か何かを教えますね。あのあたり、いかにも良き熊本の伝統を感じさせますね。一私学だけど、それが存在するちゃんととした背景、歴史風土がある。

**長野** 熊本はやはり自然もいいですよ。よそから来た人は「熊本はいい」と言いますもんね。気候はいいし、景色もいい、水もうまい。全国の県庁所在地を全部見て回りましたが、一番良かったのは仙台と熊本。住むならこの二つの市だなと思った。

**安永** 鈴木健二さんがいらしたりするのだから。

**平野** 都市としてのアイデンティティーというのはあると思いますよ。それが最近、少し希薄になつてきている。しつかりしないと普通の地方都市になつてしまつ。

**安永** 一つ都市としてのバックボーンを持たないといけないと思いますね。

**井上** どうもまずい司会でしたが、長時間ありがとうございました。



# 大熊本市の成立

市史編さん委員 鈴木喬

明治維新ののち、城下町熊本は九州の中心都市として、鎮台が置かれ、郵便役所・電信局にはじまる各種官庁も設置されはじめた。そこから「兵隊町」「官員町」の傾向が強まってきたが、西南戦争のため旧城下町の大半は焼野原となってしまった。

しかし戦後の町の復興は早く、鎮台はやがて師団となり、各種官庁や商社、それに学校が相ついで設置され、熊本市街は「兵隊町」「官員町」に加えて「勤め人町」「学生町」の様相まで持つようになった。熊本平野の農産物も熊本市街に集められて各地に搬出されるし、消費者を多く抱えて食料品や衣料品その他の日常生活必需品を供給する店舗も増加し、熊本は「商業都市」としても発展はじめていた。

ところが、明治十二年の郡区町村編成法で成立した「熊本区」は旧城下町に迎町・新屋敷町を加えたものにすぎず、明治二十二年の市制・町村制に基づいて出来上がった新「熊本市」も、その範囲は熊本区と全く同じであった。もつとも二十二年に熊本市を成立させると、県は旧城下町周辺の村々の合併を計画勧奨したが、種々の障害があつてこの合併は実現しなかつた。

熊本市は市街地整備のために、まず市街地の中央に位置する山崎練兵場の郊外移転を、陸軍省と切衝してこれに成功した。三十三年のことである。これと前後して騎兵隊・野砲隊・工兵隊などが大江村に移転し、学校もこの地に新設されはじめた。山崎練兵場跡地は新市街として整備されていったが、近代都市としての陣容を整えるためには、さらに近隣町村への市区拡張が必要であつた。



写真は大正10年6月5日、新市街記念碑前での合併祝賀仮装行列。

方徳蔵・松村辰喜らの組織する「大熊本期成会」であった。この期成会の成立には、本県財界の大立物の高橋長秋や紫藤草の尽力が大きかった。彼等は当時盛んであった熊本の政争の宿弊を打破して、県・市民が相互の利益のために團結することを強調した。その甲斐あって期成会は同九年五月に発足し、以後その運動は超党派で行われ、佐柳市長の尽力と川口知事・在京諸先輩の援助によって、熊本市への周辺町村吸収合併の機運は俄に熱した。

大正十年六月一日、熊本市を取巻く十一か町村の合併が実現した。十か町村とは春日町と黒髪村・池田村・花園村・島崎村・横手村・古町村・本庄村・大庄村・本山村・春竹村である。これまで白川の南岸に僅かに足を踏みかけていた熊本市は、今や白川の両岸に沿って四周に拡張され、それまでの五・五五平方糠、人口七万余から、面積は六倍強の三四・三四平方糠、人口十二万一千余と急激な膨脹を遂げた。この結果全国で第十二位、九州では長崎を第一位とし福岡市を抜いて第一位となつた。

合併の祝賀会は六月五日に行われた。各町村から集つた仮装行列の集団は、日清戦役記念碑前（現辛島公園清正銅像前）に勢揃いして気勢をあげた。大熊本市が成立すれば当然その内容充実が要求される。県庁前の木造二階建の市役所は狹隘に過ぎるので、鹿橋南の畔に、白亜の新庁舎が完成したのは大正十二年末のことであった。ついで翌十三年には市役所前の広大な地域を占めていた歩兵第二十三連隊兵営を渡鹿に移転させ、市営電車を春日町から市街地を通過して大江町・出水村へ通し、八景水谷を水源とする上水道も開設した。これを大正の三大事業と呼んでいる。

翌十四年三月から五月にかけて二十三連隊跡地で開かれた「三大事業記念国産共進会」は盛況裡に終始し、会期中の四月には出水村もまた熊本市に吸収合併されるに至つたのである。

そこで大正五年頃大熊本建設の声がおこり、接続九町村との合併案が出たがなかなか具體化せず、同七年に至っても盛んに論議されながらも陽の目を見なかつた。そこでこの実現を目指として実動のトップを切つたのが、鎌



くまもと100

## 占領行政と熊本

現代専門部会　眞　藤　長　生



地元の状況をマ大佐（中央右端）に説明する曾我知事と石坂市長（左端）＝昭和二十年十月十三日、市公会堂　写真提供／熊本日日新聞社

昭和二十年八月三十日、連合軍最高司令官（SCAP）マッカーサーは厚木飛行場に着いた。連合軍、実質はほとんど米軍の日本占領の始まりである。米軍は逐次全土に展開するが、熊本への進駐は十月五日から始まり、九月司令官マクファーランド大佐以下幕僚兵員が上熊本駅着、移駐を完了した。四日、熊本市長に石坂繁が就任し、八月十日赤痢で死去した前市長・平野龍起の後を継いだが、石城市长の外部への初めての仕事が、占領軍司令官の出迎えだった。

「初期の対日基本政策」（九月二十二日、SWNCC二二八）が米大統領からSCAPに示された。それには、「天皇を含む政府機構および諸機構を通じその権限を行使せよ」とあり、マッカーサーは絶対の権力を握る。ド

イツとは異り、降伏後の占領で日本の政治機構は崩壊しなかつたので、連合軍総司令部（GHQ）は間接統治を行つた。とはいっても、GHQの各局各課がSCAPの名によつて発する指令、覚書、書簡などは形式、軽重はあるまいが、マッカーサーの個性、幕僚のからみ、米国の世論、連合国への意向がないまま、になって、年とともに微妙に変化する。国会図書館にある熊本軍政府発来信の文書を見ると、大半が乳幼児、妊娠婦向けや基幹産業従事者への食料放出、報奨米軍衣料の割当や供米実績の報告などが大半だ。占領行政の成否が食糧危機克服にかかっていた

初期の占領行政はある面では苛酷とさえ見られた。だが、M4戦車、一五榴弾砲などの重装備、軽快で強い馬力のジープを備えた海兵第八連隊など五千の米部隊の火力と機動力に市民はあつけにとられた。当初不安にかられた市民も町を行く米兵が若く陽気で、大体において重規が守られ、なつくこどもにチヨコレートやガムを進呈する光景に心をなごませた。食はなく物とじとり、再建のモデルをそれのみつけた。

初期の占領行政はある面では苛酷とさえ見られた。だが、マッカーサーの個性、幕僚のからみ、米国の世論、連合国への意向がないまま、になって、年とともに微妙に変化する。国会図書館にある熊本軍政府発来信の文書を見ると、大半が乳幼児、妊娠婦向けや基幹産業従事者への食料放出、報奨米軍衣料の割当や供米実績の報告などが大半だ。占領行政の成否が食糧危機克服にかかっていた

地方自治法を定めた。さらに農地解放、財閥解体を要求するなどの劇的な改革を遂行した。

地方行政を監視するため、占領軍は各県に軍政チーム、軍政府を置いた。熊本軍政府は県庁に置かれ、マーフィー少佐を長とし（初代）、法務、経済、教育、宗教、厚生保健、検閲など各課があつた。このほか、公安関係のC.I.Cが営業社跡（現NHK熊本放送局）のうちに新茶屋町が東洋軒（現安田生命第三ビル）に陣どつた。

市民は複雑な感情で勝利者を受け入れた。勝ち倣つて、無理難題を言い、粗暴な言動に及ぶ将校兵士もないではない。

しかし、彼はP.T.Aづくりや成人学級、青年団や婦人團体の組織づくりを精力的に推進、個々の意見を尊重し、討議を積み重ねて、合意を形成する米国流の運営を指導した。二十二年四月の教職員異動で、熊本県に初めて女性校長四人、女性教頭四人が生まれたが、婦人の地位向上に彼が尽力したのは認めなければならないであろう。

彼について、県教育委員長を勤めた福田令寿は「当然即妙に話をする人だつた。牧師だつたと言われるがそうではあるまい」と後日回想している。どうやら学校の先生だつたらしい。

# 新熊本市史編纂委員会

## 自然、民俗・文化財専門部会を設置

□民俗・文化財部会長 鈴木喬

第五回新熊本市史編纂委員会（平成元年十一月十七日開催）は、新たに自然及び民俗・文化財専門部会の設置を決め、同専門部会は、十二月十九日付をもって発足しました。

部会長及び専門員の方々は次のとおりです。

### ▼自然専門部会

○部長（敬称略）

○岩本政教（熊本大学名誉教授）、入江照雄（菊池農業高等学校教諭）、下津昌司（熊本大学教授）、濱田善利（熊本工業大学助教授）、横山勝三（熊本大学教授）、渡邊一徳（熊本大学助教授）

### ▼民俗・文化財専門部会

○鈴木喬（熊本大学非常勤講師）、大塚正文（大津産業高等学校教諭）、坂本経昌（熊本博物館学芸員）、佐藤征子（熊本県肥後学研究嘱託）、白石巖（熊本民俗文化研究会会員）、西輝喜（熊本第一工業高等学校講師）、安田宗生（熊本大学助教授）

## □自然部会長 岩本政教

### 〔部会長の抱負〕

歴史の舞台として、はたまた市民を取りまく環境としての自然、より人間的には風土ともよばれる自然是、第一次の生産関係から、観照、保健、文芸、宗教など非生産関係の

上層文化、更には住民性に至るまで、長い歴史を通じ市民と深い関連を持ち続けてきた。自然は時には女神の如く和やかに、時には呪詛に満ちた魔女の如き様相を表わす。自然と人間との関係はその化方、程度において、原始から現代の工業化、情報化社会へと大きく変貌している。

天文学はさて置き、自然の包括する内容は、熊本地域の位置（数理的・社会的）気候、地形、地質、土壤、水（河川、海、陸水等）生息する動植物から、自然景観等多岐に亘るが、これら諸事象相互間の関連に留意しつゝ、いかにして地域に根ざした有機的統一体としての自然を把握し、地域を浮き彫にした説明的記述が実現できるかが大きな課題であり、羅列的平板な記載に陥らぬよう多くの地図、グラフ、写生等を駆使し、視覚に訴え市民の歓心と興味を呼びおこすよう心掛けたい。

熊本地域内には、西山の金峰山、阿蘇西麓に続く九州屈指の広大な熊本平野が展開、平野の上に乳房のように突き出た立田山、託麻三山があり、市街地を貫流する白川、南には水量豊かな緑川、台地の縁辺から湧出する水を集める市民のオアシス津江湖、八景水谷、豊かな地下水等これほど変化に富み、自然に恵まれた都市は全国的に珍しいといえよう。

然し産業革命以降における産業、交通、通信、情報の発達は、市街地の拡大、緑の喪失、エネルギー消費の過剰等による自然の変容、汚染、破壊が環境問題として市民の間にも大きくクローズアップされており、自然の変化と復元を動態的にどこまで究明し得るかも関心のあるところでその具現に努力したい。

戦前的地方史は、そのほとんどが文献資料によって書かれてきました。そのため、地域の生活面の歴史的全体像を把握することが困難でした。そこで文書・記録の欠落部分

を補完するものとして、戦後民俗資料が一段と重視されるようになりました。

民俗資料には色々な区分がありますが、一応「社会伝承」「経済伝承」「儀礼伝承」「信仰伝承」「芸能伝承」「言語伝承」それに「民具」などがあげられています。

これらはいずれも社会の慣習として、地域集団を基盤としてその集団と不可分に存在したもので、従つてその地域性と歴史性をとくに濃く反映してきました。

ところが戦後の激しい近代化の波に洗われて、これら民俗資料は急速に失われ、今やすべての伝承が存亡の危機にさらされています。加えて熊本市は旧城下町と近郊農・山・漁村が合併して成立していますので、それらに独自の習俗も大転換しつつあります。そこで、各地域、地域の庶民生活や文化に視点をあてて、そこに生きてきた人々の姿を浮び上らせたいと思っています。

なお文化財を広義にとれば、「すべての文化活動の客観的所産としての諸事象又は諸事物」となつて民俗資料もその中に含まれるわけですが、今回はその中から国・県・市指定文化財を中心にして記述することにしました。両者ともに市周辺部をも対象とし、歴史の中で生み出された精神的・文化的価値と成果を浮き彫りにできたらと考えています。



## ▼調査トピックス▲

## 神園山瓦窯址

## 原始・古代専門部会

白木原 和 美

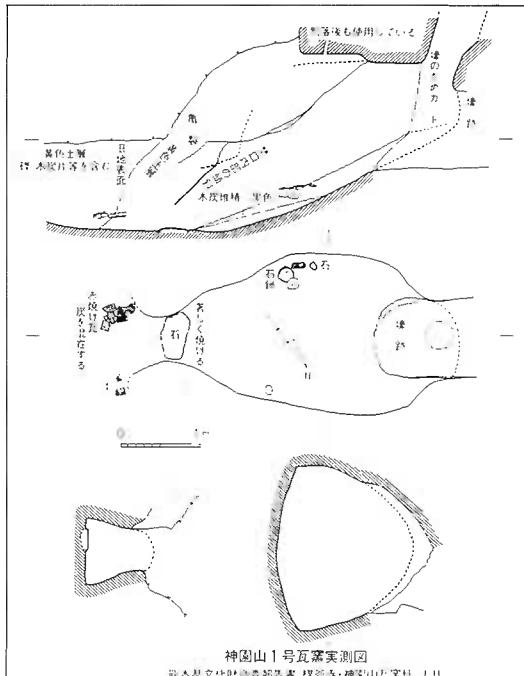
地も、往時の人工平坦面を利用したものかも知れない。今回はこの「地形」を実測しただけだが、昭和四一年に三島格氏等が「國府や國分寺などの、造瓦生産とも関連する重要な問題を持つている」として僕に調査を加えている。調査は、流入土を除いて内部を調査したにとどまり、「都合により」灰原は未調査のままである。紋瓦が発見できず、年代は他の資料に拠って十一世紀に当ておられる。(註)

市の東北に神園山・小山山がひとつ山塊を成して跨っている。ふたつの山の埠口が道路になつていて、その峠の小山山側に諏訪神社がある。この峠を南に越えて、○○メートルほど行った右手、つまり神園山側の雑木林の中に、基の瓦窯がある。

このあたりは道路と平行しながら南に開けてゆく極く小さな谷がある。谷頭は小規模な山崩れと道路工事で埋められた。この下が気になるが、何如とも仕難い。少なくとも開口したものはなかつたらしい。

この理土の下から水が滲み流れで小さな谷地形を作っている。いじましいことにこの「溝」が段丘面を持つていて、左岸側はその端が山肌になり、その二・三メートル上が平坦に変り、敷を透して道路が見える。平坦地の一部は最近まで耕地であった。

右岸側は段丘面の先に一メートルほど高いもうひとつの段丘状の地形があり、その幅は数メートルに達し、更に先は急斜面の山肌で、窯はこの山肌に穿たれている。この地形は明らかに人工による。つまり、小さな谷の右岸を切り抜いて、一つ(以上)の瓦窯を建設したもので、前述の左岸の耕作



(註)三島格「桟谷寺・神園山瓦窯址」(熊本県教育委員会発行) 第40集

（註）三島格「桟谷寺・神園山瓦窯址」(熊本県教育委員会発行) 第40集

（註）三島格「桟谷寺・神園山瓦窯址」(熊本県教育委員会発行) 第40集

平成元年  
第六回近代専門部会  
1・9 第五回中世文化財調査(西山・中央南地区)

1・15 原始・古代地区巡査調査(小山・長崎地区)

1・21 近代史料調査(牛深市・宇良田家史料)

1・22 原始・古代史料調査(九州女学院高校所蔵考古

資料)

1・24 (27) 中世文化財調査(西山・中央南地区)

1・25 第五回中世専門部会

1・28 現代史料調査(調査打ち合せ)

1・29 現代史料調査(熊本商科大学附属図書館)

2・7 原始・古代古墳調査(立山周辺)

2・11 原始・古代古墳調査(立山周辺)

2・12 原始・古代地区巡査調査(西山地区)

2・13 (16) 近代史料調査(国立国会図書館・国立公文

書館)

2・14 (27) 中世史料調査(市史編さん事業他都市調査平塚市・浦和市)

2・15 (27) 市史編さん事業他都市調査平塚市・浦和市

2・16 (27) 市史編さん事業他都市調査平塚市・浦和市

2・17 市史編さん事業他都市調査平塚市・浦和市

2・18 (27) 市史編さん事業他都市調査平塚市・浦和市

2・19 (27) 市史編さん事業他都市調査平塚市・浦和市

2・20 (27) 市史編さん事業他都市調査平塚市・浦和市

2・21 (27) 市史編さん事業他都市調査平塚市・浦和市

2・22 (27) 市史編さん事業他都市調査平塚市・浦和市

2・23 (27) 市史編さん事業他都市調査平塚市・浦和市

2・24 (27) 市史編さん事業他都市調査平塚市・浦和市

2・25 (27) 市史編さん事業他都市調査平塚市・浦和市

2・26 (27) 市史編さん事業他都市調査平塚市・浦和市

2・27 (27) 市史編さん事業他都市調査平塚市・浦和市

2・28 (27) 市史編さん事業他都市調査平塚市・浦和市

2・29 (27) 市史編さん事業他都市調査平塚市・浦和市

2・30 (27) 市史編さん事業他都市調査平塚市・浦和市

3・1 (27) 近代史料収集(県立図書館所蔵、検地帳コピー開始)

3・3 (27) 近代史料調査(熊本博物館史料)

3・10 (27) 中世史料調査(東大文書収集について東大史料

進行状況の打ち合せ)

3・11 (27) 近代史料収集(県立図書館所蔵、検地帳コピー)

3・12 (27) 原始・古代遺跡調査(秋津・健軍地区)

3・13 (27) 原始・古代史料調査(関西大学考古資料室)

3・14 (27) 大理大学附属参考館・奈良國立文化財研究所

3・15 (27) 現代史料調査(外務省外交史料館・國立國

3・16 (27) 現代史料調査(新潟博物館・新聞雑誌文庫)

3・17 (27) 現代史料調査(東大明治新聞雑誌文庫)

3・18 (27) 現代史料調査(西山地区)

3・19 (27) 現代史料調査(西山地区)

3・20 (27) 現代史料調査(西山地区)

3・21 (27) 現代史料調査(西山地区)

3・22 (27) 現代史料調査(西山地区)

3・23 (27) 現代史料調査(西山地区)

3・24 (27) 現代史料調査(西山地区)

3・25 (27) 現代史料調査(西山地区)

3・26 (27) 現代史料調査(西山地区)

3・27 (27) 現代史料調査(西山地区)

3・28 (27) 現代史料調査(西山地区)

3・29 (27) 現代史料調査(西山地区)

3・30 (27) 現代史料調査(西山地区)

4・1 (27) 第六回原始・古代史料調査(西山地区)

4・2 (27) 第七回原始・古代史料調査(西山地区)

4・3 (27) 第八回原始・古代史料調査(西山地区)

4・4 (27) 第九回原始・古代史料調査(西山地区)

4・5 (27) 第十回原始・古代史料調査(西山地区)

4・6 (27) 第十五回原始・古代史料調査(西山地区)

4・7 (27) 第十四回原始・古代史料調査(西山地区)

4・8 (27) 第十三回原始・古代史料調査(西山地区)

4・9 (27) 第十二回原始・古代史料調査(西山地区)

日誌抄

# 細川藩御召船の文書

もんじょ

## 近世専門部会 森恒雄



波奈之丸の船図（熊本博物館蔵「竹内家文書より」）

上岡は、細川藩御召船であった波奈之丸の船図である。その御召船波奈之丸の船体の一部で、藩主がいる御座敷の部分については、今日、国的重要文化財（建造物）として熊本城内天守閣の陳列場に展示してあるので、皆様方はよく見かけられるでしょう。非常に豪華な二階造り

をしていて、他の藩では類例をみない御召船となつていいます。しかしその船の全体像や作製した船大工、およびその設計から製作に至る過程は、今日まであまり知られていませんでした。

そのようななかで、ごく最近、この波奈之丸についての史料が多く見出され、御召船についての諸関係が明確になるようになりました。それは、川尻町の御船作業所で細川藩の御船大工棟梁をしていました竹内家の史料が、熊本博物館に寄託されたのです。近世専門部会では、早速調査にかかりました結果、寛永二十一年（正保元年、一六四四）から嘉永五年（一八五二）にわたる期間の文書、約四五〇点が整理されました。江戸時代中期以降の御用船の造船に関する史料がこれほど多くみられるこ

とは、おそらく全国一の豊富な内容をもつ史料であることが確認されました。なかでも当時は秘密書とされた御船関係の歴史的發展の研究には欠かせない史料となるでしょう。上掲した波奈之丸についても、各部首の寸法が記され、またそれに要した木材や船大工の構成も知りえます。それは波奈之丸だけでなく、泰賀丸・飽田丸・永泰丸と御早船・鯨船・五拾挺立船等の秘法書も含まれていて、細川藩の御用船の姿を刻明に知ることが出来るようですが、また参考交換のため、豊後鶴港に御召船が繫留されて備えられていますが、その姿がみられるし、川尻での御船溜りと御船作事所の様子も知りうるようです。さらに、幕末期には外国船の構造にも配慮したようでお、オランダ船の図がみられて、洋船の文化・技術をも習得しようとした姿がみられるのは、当時の世相が近代科学性をもつて洋学に関心が向けられたことが、造船にもあったことが判明し、興味がそそがれますし、またオランダ船の構造の解説が幕末に細川藩が作った龍驤艦に反映したであろうこともうかがわせます。

4 . 4	4 . 17	第五回近世専門部会（平成元年度事業計画）
4 . 24	4 . 24	第十七回部会長会議（平成元年度事業計画）
5 . 8	5 . 8	現代聞き取り調査（市文化財収蔵庫）
5 . 14	5 . 14	原始・古代地区巡査調査（東部地区）
5 . 15	5 . 15	近代史料調査（古閑家文書）
5 . 21	17	中世文化財調査（十種寺・吉神社・近見日吉神社）
5 . 21	17	現代聞き取り調査（市議会議員「高度成長時代の光と影」）
5 . 25	5 . 25	原始・古代地区巡査調査（東部地区）
5 . 25	5 . 25	第七回中世専門部会（本年度事業の実施について）
5 . 25	5 . 25	書館・国立国会図書館
5 . 25	5 . 25	近世・近代史料調査（熊本博物館所蔵）
5 . 25	5 . 25	第四回新熊本市史編纂委員会（平成元年度新熊本市史編纂事業実施計画の策定）
5 . 25	5 . 25	第七回中世専門部会（本年度事業の実施について）
6 . 1	6 . 1	中世文化財本調査（西山地区）
6 . 11	6 . 11	原始・古代地区巡査調査（南部地区）
6 . 12	6 . 12	第八回近世専門部会
6 . 12	6 . 12	原始・古代地区巡査調査（西山地区）
6 . 12	6 . 12	近世史料調査（本妙寺所蔵文書）
6 . 24	6 . 24	原始・古代史料調査（下松尾城跡）
6 . 26	6 . 26	现代アンケート調査（下松尾城跡）
6 . 26	6 . 26	中世城跡予備調査（下松尾城跡）
6 . 28	6 . 28	近世史料聞き取り調査（安國押寺）
6 . 28	6 . 28	近世史料調査（本妙寺所蔵文書）
6 . 28	6 . 28	原始・古代考古遺物調査（県文化財収蔵庫）
6 . 28	6 . 28	现代アンケート調査（下松尾城跡）
6 . 28	6 . 28	中世城跡予備調査（下松尾城跡）
7 . 1	7 . 1	近世史料調査（本妙寺所蔵文書）
7 . 1	7 . 1	原始・古代考古遺物調査（県文化財収蔵庫）
7 . 3	7 . 3	现代アンケート調査（下松尾城跡）
7 . 3	7 . 3	中世城跡予備調査（下松尾城跡）
7 . 3	7 . 3	近世史料聞き取り調査（安國押寺）
7 . 7	7 . 7	近世史料調査（本妙寺所蔵文書）
7 . 7	7 . 7	原始・古代考古遺物調査（県文化財収蔵庫）
7 . 7	7 . 7	现代アンケート調査（下松尾城跡）
7 . 7	7 . 7	中世城跡予備調査（下松尾城跡）
7 . 9	7 . 9	近世史料調査（本妙寺所蔵文書）
7 . 9	7 . 9	原始・古代考古遺物調査（県文化財収蔵庫）
7 . 9	7 . 9	现代アンケート調査（下松尾城跡）
7 . 9	7 . 9	中世城跡予備調査（下松尾城跡）
7 . 9	7 . 9	近世史料聞き取り調査（安國押寺）
7 . 9	7 . 9	近世史料調査（本妙寺所蔵文書）
7 . 9	7 . 9	原始・古代考古遺物調査（県文化財収蔵庫）
7 . 9	7 . 9	现代アンケート調査（下松尾城跡）
7 . 9	7 . 9	中世城跡予備調査（下松尾城跡）
7 . 9	7 . 9	近世史料聞き取り調査（安國押寺）
7 . 17	7 . 17	近世史料調査（本妙寺所蔵文書）
7 . 17	7 . 17	原始・古代考古遺物調査（県文化財収蔵庫）
7 . 17	7 . 17	现代アンケート調査（下松尾城跡）
7 . 17	7 . 17	中世城跡予備調査（下松尾城跡）
7 . 21	7 . 21	近世史料調査（本妙寺所蔵文書）
7 . 21	7 . 21	原始・古代考古遺物調査（県文化財収蔵庫）
7 . 21	7 . 21	现代アンケート調査（下松尾城跡）
7 . 21	7 . 21	中世城跡予備調査（下松尾城跡）
7 . 28	7 . 28	近世史料調査（本妙寺所蔵文書）
7 . 31	7 . 31	原始・古代考古遺物調査（県文化財収蔵庫）
7 . 31	7 . 31	现代アンケート調査（下松尾城跡）
7 . 31	7 . 31	中世城跡予備調査（下松尾城跡）
8 . 8	8 . 8	近世史料調査（本妙寺所蔵文書）
8 . 8	8 . 8	原始・古代考古遺物調査（県文化財収蔵庫）
8 . 8	8 . 8	现代アンケート調査（下松尾城跡）
8 . 10	8 . 10	近世史料調査（本妙寺所蔵文書）
8 . 10	8 . 10	原始・古代考古遺物調査（県文化財収蔵庫）
8 . 10	8 . 10	现代アンケート調査（下松尾城跡）
8 . 11	11	近世史料調査（本妙寺所蔵文書）
8 . 11	11	原始・古代考古遺物調査（県文化財収蔵庫）
8 . 11	11	现代アンケート調査（下松尾城跡）
8 . 11	11	中世城跡予備調査（下松尾城跡）
8 . 16	16	近世史料調査（本妙寺所蔵文書）
8 . 16	16	原始・古代考古遺物調査（県文化財収蔵庫）
8 . 16	16	现代アンケート調査（下松尾城跡）
8 . 16	16	中世城跡予備調査（下松尾城跡）
8 . 23	8 . 23	近世史料調査（本妙寺所蔵文書）
8 . 23	8 . 23	原始・古代考古遺物調査（県文化財収蔵庫）
8 . 23	8 . 23	现代アンケート調査（下松尾城跡）
8 . 23	8 . 23	中世城跡予備調査（下松尾城跡）
8 . 25	25	近世史料調査（本妙寺所蔵文書）
8 . 25	25	原始・古代考古遺物調査（県文化財収蔵庫）
8 . 25	25	现代アンケート調査（下松尾城跡）
8 . 25	25	中世城跡予備調査（下松尾城跡）
8 . 29	29	近世史料調査（本妙寺所蔵文書）
8 . 29	29	原始・古代考古遺物調査（県文化財収蔵庫）
8 . 29	29	现代アンケート調査（下松尾城跡）
8 . 29	29	中世城跡予備調査（下松尾城跡）
9 . 4	4 . 2	第九回近代専門部会
9 . 4	4 . 2	近世史料調査（戦災史料・市民意識）

12 12 12 12 12 12	12 12 12 12 12 12	12 12 12 12 12 12	12 12 12 12 12 12	12 12 11 11 11 11	11 11 11 11 11 11	10 10 10 10 10 10	9 9 9 9 9 9	9 9 9 9 9 9
26 23 20 19 19	19 16 15 12 12	7 8 9 10	1 3 12 12 12	1 30 30 22 18	17 13 11 10 6	5 4 2 31	30 28 23 17	14 11 10 9 7 6
第一回専門部会 第一回自然専門部会 第一回民俗・文化財専門部会 第一回専門部会(聞き取り調査) 原始・古代古墳調査(天福寺裏山古墳)	近・現代史料調査(新聞史料) 近・現代史料調査(新開史料)	中世文化財調査 中世文化財調査(小山町・長嶺)	第五回新熊本市編纂委員会(基本計画の一部変更について)、各専門部会史料調査報告 第十回近代専門部会 第五回新熊本市編纂委員会(将来的都市像を探る) 現代聞き取り調査(石坂多美子氏)	第十二回部会長会議(第五回編纂委員会提出議題について) 第九回原始・古代専門部会 近・現代史料調査(古閑家文書) 第九回現代専門部会 現代聞き取り調査(瀬口龍之助氏)	西口惟精(清水東町)、岸晃子(西原二丁目)、松永康子(池田一丁目)、北村直登(新町三丁目)、井場美津枝(大江六丁目)、黒田行治(新町二丁目)、島本悦郎(画岡町所島)、満永貞徳(小山町)、野田哲也(小山町)、瀬口龍之介(黒髪二丁目)、石坂多美子(茅ヶ崎市)、徳富敬太郎(逗子市)、錦井一之(横手三丁目)、池上尊義(花園四丁目)、森力生(花園七丁目)、朽木敬興(八景水谷二丁目)、中西誠一(横手一丁目)、竹内末人(川尻町)、宇良田スマ(牛深市)、平井勝彦(豊中市)、草間貫吉(神戸市)、光水一子(川尻町)、馬原千鶴子(飽託郡天明町)、志垣龍映(松尾町上松尾)、田尻憲靖(松尾町上松尾)、徳永太郎(福岡県糸島郡)、鴻池合名会社(東大阪市)、鈴永青文庫、大阪市史編纂所、大阪府立中ノ島図書館、徳富蘆花文学館、山王草堂記念館、跡前田育徳会、京都市歴史資料館、京都大学文学部博物館、奈良国立文化財研究所、関西大学考古資料室、天理大学参考館、同志社大学図書館、九州市立図書館、熊本市医師会、熊本県味噌工業協同組合、熊本県醤油工業協同組合、熊本県蚕糸振興協力会、熊本県菓子工業組合、熊本大学図書館、熊本商科大学図書館、熊本県立図書館、熊本県教育委員会、熊本県文化課、九州女子学院高等学校、熊本日日新聞社、熊日情報文化センター、跡熊本城顕彰会、熊本博物館、このほか中世文化	近世史料調査(古閑家・蔵家文書) 近世史料調査(塩田家) 近世・近代・現代合同専門部会(総括編) 近世・古代地区巡査調査(花園・柿原地区) 近世史料調査(熊本城所蔵史料) 近世・現代合同専門部会(新聞史料編) 第九回専門部会 現代史料調査 中世文化財調査 中世文化財調査(西山地区) 第六回近世専門部会 近世・古代地区巡査調査(西山地区)	研究誌について) 近世史料整理(古閑家文書・味噌醤油組合) 第八回中世専門部会(中世編内容項目等) 第六回近世専門部会 原始・古代地区巡査調査(西山地区) 近代史料調査(酒造組合) 第一回専門部会議(現況報告・絵図編・市史研究誌について) 近世史料調査(古閑家・蔵家文書) 近世史料調査(塩田家) 近世・近代・現代合同専門部会(総括編) 近世史料調査(熊本城所蔵史料) 近世・現代合同専門部会(新聞史料編) 第九回専門部会 現代史料調査 中世文化財調査 中世文化財調査(西口家) 第九回原始・古代専門部会 近・現代史料調査(古閑家文書) 第九回現代専門部会 現代聞き取り調査(瀬口龍之助氏)	

## 史料調査に

ご協力いただいた方々 (自 平成元年一月 至 平成元年十二月)

## 史料の提供について: 楽願 !!

(敬称略)

小早川和範(船場町)、横井和子(神戸市)、古閑孝(蓮台寺町)、東光彦(御嶺町)、塩田貢次郎(田迎町出仲間)、

西口惟精(清水東町)、岸晃子(西原二丁目)、松永康子(池田一丁目)、北村直登(新町三丁目)、井場美津枝(大江六丁目)、黒田行治(新町二丁目)、島本悦郎(画岡町所島)、満永貞徳(小山町)、野田哲也(小山町)、瀬口龍之介(黒髪二丁目)、石坂多美子(茅ヶ崎市)、徳富敬太郎(逗子市)、錦井一之(横手三丁目)、池上尊義(花園四丁目)、森力生(花園七丁目)、朽木敬興(八景水谷二丁目)、中西誠一(横手一丁目)、竹内末人(川尻町)、宇良田スマ(牛深市)、平井勝彦(豊中市)、草間貫吉(神戸市)、光水一子(川尻町)、馬原千鶴子(飽託郡天明町)、志垣龍映(松尾町上松尾)、田尻憲靖(松尾町上松尾)、徳永太郎(福岡県糸島郡)、鴻池合名会社(東大阪市)、鈴永青文庫、大阪市史編纂所、大阪府立中ノ島図書館、徳富蘆花文学館、山王草堂記念館、跡前田育徳会、京都市歴史資料館、京都大学文学部博物館、奈良国立文化財研究所、関西大学考古資料室、天理大学参考館、同志社大学図書館、九州市立図書館、熊本市医師会、熊本県味噌工業協同組合、熊本県醤油工業協同組合、熊本県蚕糸振興協力会、熊本県菓子工業組合、熊本大学図書館、熊本商科大学図書館、熊本県立図書館、熊本県教育委員会、熊本県文化課、九州女子学院高等学校、熊本日日新聞社、熊日情報文化センター、跡熊本城顕彰会、熊本博物館、このほか中世文化

財調査で市内各地の神社・寺院に伺いました。お世話になりました関係者の方々に心からお礼申し上げます。

市史の編さんにおいては、文書、記録、遺物、遺跡、伝承的習俗など有形無形の史料を収集することが、大切な仕事となります。町や村、寺社に伝えられるように、郷土の先人の生きかたを知る手掛りとなるものは、すべて史料となります。町や村、寺社に伝えられたもの、個人の家に伝えられたもの——手記、日記、手紙、写真、地図、古文書など、手書き、印刷物、体裁は問いません。情報をお寄せください。

問い合わせ・連絡先は

熊本市手取本町一番一号  
熊本市役所市史編纂事務局

電話 三二八一〇三三

## 編集後記

本誌は、各専門部会の史料調査の成果をもとに、市史編さん事業の進行状況をお知らせするため発行しています。今後には、市制百周年に因み、近・現代専門部会を中心、「くまもと百年」を特集しましたが、執筆された先生方には、紙面の関係で十二分に意を尽して戴けなかつたかと申し訳なく思っています。

今後、市民のみなさんのご要望にそって、より充実した「市史編さんだより」にしたいと思いますので、ご意見や情報をお寄せいただければ幸いです。